



TITLE:

現在分詞 - 口語と文語における用法

AUTHOR(S):

塩谷, 饒

CITATION:

塩谷, 饒. 現在分詞 - 口語と文語における用法. 独逸文學研究 1958, 7: 1-19

ISSUE DATE:

1958-12-15

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/186266>

RIGHT:

現在分詞一口語と文語における用法

塩 谷 饒

1. 文明諸語においては口語の體系と文語の體系が共存している。言うまでもなく口語は日常の談話に用い、口に發し耳に聴くものであり、文語は文書に用いるものであって耳に訴えることを目的とすると言う本質的な差がある。従って多くの場合、構造からいっても若干の差があるのが普通である。ドイツ語はわりあいその差が大きい方であると言われる。それは共通語の發達がまず文語において行われて來たことに由來する。文語においては傳達の主要事項と附屬的なものを文の形式によって區別する。すなわち主文と副文を並べ、これを接續詞・關係代名詞と言った品詞によって繋いで行くが、口語では主文を並べて行き、繰返しもはばからない。また口語においてはイントネーションによって意味の差が表わしうることで、接續法などによって書き分けなければならないことがある。ところでレコード・トーキー、ラジオ・テレビ等の發明は話し言葉をも遠隔の地に傳え、その上一時に大衆に影響を與え得る時代となったから、新聞雜誌等一般に影響を與えることが大きな読みものの記述も、あまり口語から離れないことを目標するようになって來ている。だから、ドイツ文法の教授にあたっても項目によっては、口語の用法あるいは口語から發して普通の散文に影響を與えているものについて一言する必要がある。教科書もそのような記述を行って置くべきだと思う。たとえば、形容詞最高級の述語的用法として現れる *am—sten* の形式、接續法過去形に代る *würde* などがそれであるが、一方文法の項目として存在していても口語ではまず用いられないものはその旨を記しておかなければならない。數詞と共に用いられる二格として説明されるもの —*Unser sind dreissig*, , 二格を補足詞とする再帰動詞 —*er spottet*

seiner selbst— などがそれに當る。

これなどは簡を旨とする文法書からは削除すべきものである。それほどでもないが關係代名詞の *welcher*, 未來分詞と呼ばれるもの —*ein zu vermei-*
dender Fehler— などは口語に現れることが少いことを附記すべきである。

現在分詞の用法も現代語においては文語・口語の両面から検討さるべき様相を呈している。結論を先に言えば、これは口語においてはきわめて制限された用法しか見せないが、一方、文語特に小説家の文においては、割合用いられ、しばしば彼らの文體の特色を示すものとなっているものである。

2. いま學校文法で現在分詞の用法について纏めて見ると次の如くである。

1. 附加語的用法: *die liebende Mutter, das weinende Kind*

2. 述語的用法: *das Mädchen ist reizend.*

3. 名詞的用法: *der Reisende, die Vorübergehenden*

4. 副詞的用法: a) 形容詞を修飾するもの —*ein glänzend fundiertes Geschäft* b) 動詞の態様を説明するもの —*Sie entfernt sich taumelnd.*

5. 副文の短縮として: *Deutsche Lieder singend, zog das Kind durch die Strassen der Stadt.*

6. 未來分詞: *dieses zu lösende Problem*

このうち述語的用法は形容詞になりきったものだけに見られるものであり、附加語的用法及び名詞的用法は分詞における形容詞的性格が強く出たものと考えられる。また未來分詞は純粋な現在分詞と同一視し得ない。そこでドイツ語では英語の分詞構文に類似していて動詞の態様を説明する副詞的用法と、副文の短縮といわれるものが動詞的性格を前面におしだしたものである。しかしながら、これらも過去分詞が完了形や受動態に絶対不可欠であるが如くに文法の範疇として全く必要なものではなく、他の形式を用いて同様の表現をすることができるため、自ら使用がせばめられて來ているのである。

3. かつて私は *Luther* における現在分詞の用法を述べるに當って觸れたことがあるが¹⁾, *Hochdeutsch* においても古くから他のゲルマン諸語と同様 *sein*,

werden と結びついて、動詞的”性格を有する現在分詞が使用されていたのである。

sein の場合は継続態, werden の場合は inchoativ として、単純な動詞形で表わされていた Aktionart を分析的に書改める形式として發達した。sein + 現在分詞の形式は元來ラテン語聖書の表現の模倣が與つて力あつたであろうことはテキストの比較により容易に察せられるが、その後 Mhd. において麟譯調としてでなく heimisch になった用法が何故 Nhd. において消失して行つたかの原因を探究することはきわめて興味ある問題である²⁾。

Luther においても sein + 現在分詞という形式はきわめて少く、しかもそのほとんどがすでに形容詞的性格を強く示している。

Wie ist er denn nu sehend? (Joh. 9,20 blind の對語として) —welche gleubend waren. (Joh. 6,64 ほとんど gläubig の意味) —Jr füsse sind eilend blut zuuergiessen. (Rm. 3, 15) eilend は比較級が Phil 2, 28 に現れるから形容詞と見なせよう。まず動詞的性格を保っていると思われるのは次の例でこれは各種の本に引用されている。Es waren aber Juden zu Jerusalem wonend. (Apostelg. 2, 5) しかしこのような例は Lutherbibel において他に例がなく、しかもこの所では Luther は原文の表現法に従っていることを注意する必要がある: $\sigma\alpha\nu (= \text{waren}) \delta\epsilon \epsilon\iota\varsigma \text{'Ιερουσαλὴμ κατοικοῦντες} (= \text{wohnend}) \text{'Ιουδαῖοι}$

次の文のごときはわざわざ sein と分詞との間にコンマを入れて継続態になることを避けている。οὐ ὁ Χριστὸς ἐστίν ἐν θεῷ καθήμενος (Col. 3, 1)—da Christus ist, sitzend zu der rechten Gottes. すなわち、Luther において何故このように少くなっているかと言へば、もちろん當時の Ostmitteledeutsch においてこのような語法がほとんど消滅していたからである。その消滅の原因は分詞の語尾の變化に求められよう。Mhd. においてこの形式が定着していたのは、分詞の形が —ende であり不定詞との間に一線が劃されていたからであつたことも主な原因の一つである。その後語尾が e の脱落

によって *-end* に變つたが諸方言においてさらに語末の *d* をも失つたことは、*werden+schlafend* の *inchoativ* から *werden+schlafen* という未來形式が發達したと主張する説の根據になつた事實だと察せられるばかりでなく、*sein* + 分詞の形式にも *-n* のない分詞が現れている文書が存在していることから明かである。

Vnd ihesus was ausswerffen den teuffel. (Lc. 11 Ausgabe von Zainer. um 1477) — Vnd iesus was usswerffen den tufel (Ausgabe von J. Senseschmidt)

しかしながら、語尾 *-n* の脱落した分詞が *sein* の述語となる時には Syntax の上からこれが定着し難い理由があつたと思われる。 *ich bin kommen*, *ich bin geben* では、前者は現在完了との區別がつかず、後者では受動との區別がつかないことになるのである。なぜなら *kommen*, *geben* をはじめとする動詞の過去分詞の *ge-* をつけないものが Fröhnd. では未だに存在していたから。もちろんこれは口語についてであつて文語としては *-(e)nd* が分詞として定着したことは斷るまでもない。

たゞ今述べたような事情の他にも動詞が單獨で繼續態を示すものが甚だ多いから *sein* + 現在分詞の形式を發達するに至らなかつたことは容易に察せられるであろう。なるほど Luther の同時代の作家 Johann Fischart, Hans Sachs などには若干の例を見出すことができるし、18世紀の Lessing や Schiller にもないわけではないが、Nhd. の用例では動詞がきわめて限られている。これについては Paul. Behaghel などに例が上っているが、私があたって見た文を次に引いて見よう。

Lessing: *ich war mir Sie in dem Vorzimmer nicht vermutend.* (Emilia Galotti, 2, 7) — *das warst du nicht vermuthen?* (Nathan der Weise, 2, 1) — *jede Bewegung muss bedeutend sein* (Hamburgische Dramaturgie: *beudend sein* はこの場合 “意味を持つている” と解される。)

Schiller: Goethe との Briefwechsel で *-ich bin sehr erwartend* (1,

Jan, 1796), ich bin *verlangend* (31. Aug. 1798) これらの動詞は sein と結びついたものとしてあげられる所であるが、上例の *erwartend* のときは *sehr* に規定され多分に形容詞的性格を示している。

ともあれ、これらの語法は現代まで残ることはなかったのである。

繼續態に限らず、動詞の修飾と言う点でも Luther における分詞は動詞的性格が後退している。これは直接に原文と對比するよりもむしろ 原文に 忠實な譯を示す Holtzmann と對照して見るときわめてはつきりする。以下はマルコ傳 114-20 である。

Holtzmann (1926)

Und nach der Auslieferung des Johannes kam Jesus nach Galiläa *verkündend* die Freudenbotschaft Gottes und *sagend*: Erfüllt ist die Zeit, und genaht hat sich die Herrschaft Gottes; tut Busse und glaubt an die Freudenbotschaft. Und *hinziehend* an dem Meer Galiläas sah er Simon und seinen Bruder Andreas……Und wenig weiter *gehend* sah er Jakobus, den Sohn des Zebedäus und seinen Bruder Johannes, auch sie im Boot, ihre Netze *herrichtend*. Und sofort rief er sie. Und ihren Vater Zebedäus im Boot mit den Lohnknechten *lassend*, folgten sie ihm.

Luther (1546)

Nach dem aber Johannes vberantwortet ward, kam Jhesus in Galilea, vnd prediget das Euangelium vom reich Gottes, vnd sprach Die zeit ist erfüllet, vnd das reich Gottes ist erbey komen, Thut busse, Vnd gleubt an das Euangelium. Da er aber am Galileischen meer gieng, sahe er Simon und Andreas seinen bruder. …… Vnd da er von dannen ein wenig furbas gieng, sahe er Jacobum den son Zebedei, vnd Johannem seinen bruder, das sie die netze im schiff flickten, Vnd bald riff er jnen. Vnd sie liessen jren vater Zebedeum im schiff mit den Taglonern, vnd folgeten jm nach.

Holtzmannがここで7回も分詞を使用しているのはもとよりギリシヤ語法を顧みての上であるが、Luther が一つも用いないのは全く原文に掬れていない

證據である。そしてそれはまた口語の素朴な語調をとり入れた結果であろう。

ともあれそれは現代口語の語法と相通ずるものとして、否、これに先驅けるものとして甚だ興味がある。

一方ドイツ語に近い諸言語と比較してみても、いかに現在分詞の使用に差があるかがよく分る。英語の Authorized Version 及びオランダ語の Staaten-bijbel はドイツ語の Luther 譯と並び稱せられる程の文學的價值を持つものであるが、オランダ譯ではほとんど原文の模倣と言ってよい位の分詞の使い方をして居り、Authorized Version では繼續態に関しては現代英語よりはるかに少い例しかないのに他の點では可成動詞の性格を保った使い方が見られるのである。次にマタイ傳9章を例として三者を比較して見よう。

(Vers)	Griechish	Niederländisch	Englisch	Deutsch
1	ἐμβας	gegaan zijnde	entered	trat
1	βεβλημένον	liggende	lying	der lag
2	ιδών	ziende	seeing	Da Jesus sah
4	εἰδως	ziende	knowing	Da Jesus sah
7	ἐγερθεῖς	opgestaan zijnde	arose	stand auf
8	ιδόντες	dat ziende	saw it	Da das Volk das sah
9	παράγων	voortgaande	as passed with	Da……ging
11	ιδόντες	dat ziende	when saw it	Da……sahen
12	ἀκούσας	zulks hoorende	when J. heard it	Da das J. hörte
13	πορευθέντες	gaat—heen	go	gehet
14	λέγοντες	zeggende	saying	und sprachen
18	λέγων	zeggende	saying	redete
18	ἐλθων	kom	come	komm
19	ἐγερθεῖς	opgestaan zijnde	arose	stand auf
20	προσελθοῦσα	komende tot bem	came behind him	trat zu ihm
22	{ ἐπιστραφεὶς { καὶ ἰδών	{ zich omkeerende, { en haar ziende	{ turned him { about; { and when he { saw her	{ Da wandte { sich J. Und { sah sie

23	ἔλθων	kwam	came	kam
23	ἰδών	en zag	and saw	und sah
25	εἰσελθών	kwam	went	ging
27	{κραζόντες καὶ λέγοντες	ropeende en zeg- gende	crying and saying	die schrieen und sprachen
29	λέγων	zeggende	saying	und sprach
30	λέγων	zeggende	saying	und sprach
31	ἐξελθόντες	uitgegaan zijnde	when they are departed	sie gingln aus
33	λέγοντες	zeggende	saying	und sprach
35	{διδάσκων κηρύσσων θεραπεύων	{leerende...en predikende...en genezende	{teaching... preaching... healing	{lehrte... predigte... heilte

上表からも察せられるようにギリシヤ語の分詞がオランダ語で再現されていない例はきわめて僅かである。そして單なる分詞構文にとどまらず、完了形が現れている點が注目すべきである。ここでは助動詞として *seiend* にあたる *zijende* が現れているが、もちろん *habend* にあたる *hebbende* + 過去分詞の例も決して少くない。

Zich geroepen hebbende (= *sich gerufen habend*, Mt. 10¹) — *welken een mensch gevonden hebbende* (= *welchen ein Mensch gefunden habend*, Mat 13⁴⁴) etc. のみならず受動の分詞構文 (*onderricht zijnde* = *seiend unterrichtet* Mt. 14⁸), 話法の助動詞の分詞形 (*en willende hem dooden* = *und wollend ihn töten* Mt. 14⁵) も現れる。

この傾向は 15C—17C のオランダ語に多かったものであるが現代では甚だ少くなっている。日常の用法では分詞の前に *al* (= Eng. *while*) を附して使うことが多いが — *Wij praten al wandelnde*. (= *wir sprechen wandelnd*.) *Hij zei dit al lachende* (= *Er sagte dies lachend*) — 大ていは *Kunstsprache* としての詩や散文に用いられている。ドイツ語ではまさにこの點で動詞的な性格を示す分詞の使用が發揮されている。詩文では分詞の使用によって全體の表現がひきしめられるし、散文では動作の詳細な敘述に適するものとして觀迎され

てきた。

4. 現代語ではこれがますますはっきりして来ている。Kunstsprache に比べて、口語や口語の影響を受けることが大きい記述的散文では、動詞の性格が明白な分詞の使用はおよそ少くなっている。

これは近年わが國で上映されたドイツ映畫のシナリオを點検して見ると非常によく分る。私は南江堂から發行された獨和對譯シナリオシリーズのうち手許にある „Die Letzte Brücke”, „Rose Brand”, „Solange Du lebst”, „Die Trapp-Familie” について調べて見たが、その例を拾うことができなかった。たった四本の映畫で決定することはできないかも知れないが、その何れにもなかったと言うのは他にあっても著しくないことを豫想させ、大勢を察するものと言えるのであろう。ただ映畫では極度にくづれた形式もありうるし、方言階級の違う役の登場も考えなければならないから、標準的なドイツ語の習得のために外國人むきに編集された材料を幾つか點検して見るが必要であらう。そのために私は (i) F. Hänsch: Lehrbuch der Deutschen Sprache (1954) (ii) リンガフォン (舊版及び新版) (iii) Emil Jordan Spoken German (1948) (iv) J. B. C. Grudy: Brush Up Your German (Frische Dein Deutsch auf! 1931) (v) F. F. Doring: Colloquial German (1956²) を利用して見た。

このうち (iv) を除けば次の點で一致している。われわれの生活のあらゆる方面にわたって基礎的な單語を2千から3千 使い、日常會話とそれから語法上の差が多くない説明文を織りまぜている。(iv) の Brush up your German は旅行をしている夫婦間の會話が主で、場所は都會を中心としているが、一方においてそれだけ表現が豊かであるとも言える。また所々動作を説明する地の文が(戯曲のように)あつて、他の書物を補うものとして適切である。

(i) Hänsch には次の二つ例がある。

Vergnügt pfeifend klopft er auf seine gefüllte Brieftasche, wirft den leichten Sommermantel über den linken Arm und verlässt, unter-

nehmungslustig *lächelnd*, das Zimmer. — Frau Tran hält, *zitternd* vor Neugierde ihre Hand hin. これらは何れも會話を中心した部分でなく、Lese-stücke にある。

(ii) リンガフォンでは舊版には形容詞(副詞)として辭彙に登録されているものばかりあり、新版では會話の部分でなく、記述の部分に一つ見られる。

Behaglich in ihrem Heim *sitzend*, haben Sie nichts anderes zu tun, als eine Station einzustellen.

(iii) Jordan: Spoken German には *bezeichnend*, *andauernd*, *glänzend*, *genügend* と言った形容詞的になりきったものが述語あるいは動詞の修飾語として用いられているだけ。

(v) Doring: Colloquial German: Unterhaltung のところには例がない。讀章の部分には三つあるが、これはそのうち二つは Schäfer の物語り、Fontane の詩の中のもので純粋な Colloquial German ではないから省く。また同様の理由で 2 部の諸家撰も考慮の外におく。従つて Doring の筆になるものは次の文だけである: Auf Wunsch des Heimgegangenen werden alle Blumen-spenden *dankend* abgelehnt. しかしこれは手紙の範例として書かれたものであつて、文語的なにおいが強い。

(iv) Brush up your German: 純粹の會話の部分にはない。しかし登場人物の動作の説明に分詞をあてたり、分詞構文を以てする例が若干ある。こういう用法ならば上述のシナリオにも見られたが、これは戯曲でよく使用されるものである。

Herr M. [*kommt freudestrahlend herein*]—Frau M. [*bittend*]—Herr M. [*plädierend*]—Herr M. [*langsam zu sich kommend*]—Herr M. [*betrachtet prüfend verschiedene Zigarren*]—Frau M. [*lachend*]—Herr M. [*den Hut lüftend*]—Frau M. [*die missbilligend bemerkt hat ……*]—Das Dienstmädchen. [*sie ins Empfangszimmer führend*]—Herr P [*jubelnd*] Sieg!—Herr M. [*seine Gemahlin heftig auf die Schulter klopfend*]

fend)—Herr M. (*überlegend*)—Frau M. (*triumphierend*)—Herr M. (mit dem Ellbogen seine Frau leicht *anstossend*)—Herr M. (*wütend*) もとよりこれらの例が一頁に集中しているわけではない。従って、初等の讀本において一課の中で分詞の用法を盡そうとしてことさらに分詞構文を用いた文章を集中することは不自然であり、*Kunststil* でもないのである。次の例の如きはある日本の教科書に採録されたもので原文は何れも外國のドイツ語教科書にあったものと思われるが、*up-to-date* なドイツ語ではない。

(i) Die heilige Elisabeth

……Mit Schätzen reich beladen, wurde Elisabeth, vier Jahre *zählend*, von ihrem Eltern nach der Wartburg geschickt.……

Die Tatsachen ihres Gemahls im Scherze *durchsuchend*, fand Elisabeth eines Tages ein Kreuz. …… Um Hilfe für sich und ihre Kinder *flehend*, durchzog sie Elisabeth. …… Ihre letzten Lebensjahre verbrachte sie in Marburg, dem fühllosen Keterrichter Konrad sklavisch *gehorchend*. Die niedrigsten Arbeiten *verrichtend* und sich übermässig *peinigend* und *kasteiend*, richtete sie ihren zarten Körper frühzeitig zugrunde.

全文はわずか2頁にしかないのである。

(ii) Wunderbare Rettung sich *umschauend*, gewahrte er, dass die Eiche, vom Blitz getroffen, zerschmettert am Boden lag. …… Seinem Schutzengel *dankend*, eilte er aus dem Wald. …… Tränen der Freude *vergiessend*, schloss sie ihr Kind in die Arme.

これはわずか半頁の中に使われている。これらの文例が不適當だと思われるのは、そこにあげられた分詞がほとんどすべて分詞構文の中に用いられている点である。作家は動作・状態を詳しく説明するからほとんど誰もが分詞を使用するが、それにしても最も多く使うのは定動詞の態様を説明する單純な分詞である。

Ich nickte *bestätigend*. — „Ja, danke, sehr gut,“ sagte der Knabe, — rückte *grüssend* seine Mütze. — „Dass sie sich so auf offener Strasse prügeln,“ sagte *missbilligend* der dicke Küfer ……そして分詞を規定するものがあっても短いのが普通である。Atemlos *keuchend* standen sich die drei gegenüber.

分詞の規定語が一つですまない時はコンマを用いて分詞構文とするが、その場合主文の後におかれて定動詞によって表わされる動作状態を補足的に説明する場合が自然である。

„So ein Bengel,“ sagte der alte Oberst, vor sich hin *schmunzelnd*. — und plötzlich blieb er stehen, dem Feinde das Gesicht *zeigend*. — Der lange Magere kam wieder hinter ihnen her, laut über den Platz hinter ihnen drein *schreiend*.

作家としての文例は何れも Ernst von Wildenbruch の „Das Edle Blut“ の最初から拾った。この *Erzählung* の發表されたのは 1893 年であるから必ずしも現代文の範例と言えないという抗議が起るかも知れないが、その使い方は素直であり、現代文として通るものである。

5. しかるに作家の表現上の要求は、大衆の自然な語法に従ってばかり居られないから、たとえ現代口語では餘り使われなくなっている文法形式といえども、これを十分活用することによって *Kunstsprache* としてのスタイルを維持しようと試みる。きわめて豊かな表現能力を持つ現在分詞が彼らの注意をひくことは當然である。私は以下において一人の作家がどのように現在分詞を使用しているかということを問題とするのではないが、現代のいろいろな作家が使う現在分詞は文法上どのような働きを示しているのだろうかという點を検討して見たい。ほとんどすべての作家が最も多く使う定動詞の態様を説明する單純な例は上述の Wildenbruch の例で十分であるからこれ以上とりあげないことにする。もとより私の集め得た材料は限られてはいるが、その中でも文法上検討する價值があるものを例示してみたいと思う次第である。

(i) 文として用いられた現在分詞：分詞がきわめて表現能力があると言われるのは、それがしばしば色々な副文のと等しい機能を示すためであるが、しかし今まで結局それは文の一成文として扱われてきた。しかるに現在の作家はしばしばこの前後に *Pause* をおいて獨立に切離し文としての價值を與えている。文なるものは必ず主語と述語から成立つという立場からは承認され難いであろうが、發言者の纏った考えを表わしてその場に十分意志の傳達を行いうるものが一語でも文として通用するという觀點からすればこれもその一種である³⁾。

Hausmann に次のような例がある。

Ich liess sie wieder los. *Zögernd*. Wir blickten beide erst woanders hin, dann nach dem Drachen hinauf, bei dem……

これに比べれば次の二つの例は分詞の次に前の動詞 „rief” に續く内容が接續するだけやや從屬性が強いが、スタイルとしてい簡潔となり印象的である。

„Na, Gott sei Dank”, rief Prittwitz leicht, nun kann man doch wieder ein vernünftiges Wort miteinander reden!” Und *zwinkernd*, vertraulich ihm beide Hände auf die Schultern *legend*: „Bist du glücklich, mein Junge? (Zuckmayer: Eine Liebesgeschichte)

Sie rief fast schmerzlich laut: „Geh in die Subura, in das ärmste Haus, das du findest—dort ist einer, der mehr weiss als ich—” und dann nochmals, tief und wohligh *aufseufzend*: „Meine Zeit ist um — meine Welt ist hin. (Le Fort, Pilat)

獨立した位置は與えられていないが、先行する——定動詞を缺いた——文の成文に等價值を以て接續し、共に機能としては一文に等しい場合がある。そして多くの場合やはり分詞は繼續的な意義を表わす。

Es war eine Winternacht, der Mond schon untergegangen, die Sterne *zuckend* und hell. (Zuckmayer, *ibid.*) Ihr junger gebogener Körper, ihr hellbraunes Zigeunergesicht, ihre Augen *schwebend* und *funkelnd* hinter dem Schleier, die mich aus den Winkeln anblickten

……(Hausmann)

次の文の分詞は繼續的な意味はないが、慣習的な状態を表わしていると言えるよう。

二つ對比された部分が、さらに前の文の説明となっているので、その意味においては從屬性が強いが、日本語に譯すときは完全な獨立文に移さるべきものである。

Dies war, neben anderen, ein eine Treppe hoch wohnendes Ehepaar, Kapellmeister St. Aubin und Frau vom Königstädtischen Theater, er ein kleines unbedeutendes Hutzelmännchen, sie, wie die meisten Französinen von über vierzig, von einer gewissen Stattlichkeit und mit dem Bewusstsein Stattlichkeit über ihr ganzes oberes Embonpoint *wegsehend*.

(ii) 主文章において主語の存在が一度提出され、その主語の性質状態を分詞構文が詳しく説明するスタイルは古くから時々見られたが古典語の影響を蒙ったもので純ドイツ的なものとは言い難い。現代では英蘭等の文語的なスタイルに見出されるが、作家によっては若干これらからのヒントを得た場合があるかも知れない。Carossa や Mann が時々これを行っている。

Da war ein blaugraues pyramidisches Granitstück, von eingesprengten Glimmerplättchen *fimmernd*. (Carossa: Eine Kindheit)—Zwei Kostüme waren darunter aus ihrer Theaterzeit *gehörend*; (Carossa: Spätsommer) Sein Gesicht war allerdings durch aus nicht besonders vier-eckig in der Form, *lachend* von Herzensgüte, Gesundheit und guter Laune; (Ricarda Fuch: Aus der Triumphgasse)

これらの分詞構文は關係副文の機能を持つものであって、普通の文ではもちろん後者を使う。次の Goes の文も、分詞構文が主語である名詞の性質を説明している。これも關係副文の機能を持つ。主文に Formwort としての Sein が使用されていないために全體が簡潔にひきしまつて、その場の緊迫感をよく表

現している。

Der Sohn, den Vater um eine Haupteslänge *überragend*, mit weichen Zügen, ein Mann in meinem Alter.

次の Thomas Mann の文も同種のものである。

Ein solcher Schmetterling, in durchsichtiger Nacktheit den dämmernden Laubschatten *liebend*, hiess Hetaera esmelalda. (Doktor Faust)

次の例は主語が行動を起してはいるものの、主語に続く分詞構文は行動の態様を詳しく説明するものではなく、やはり主語にかかる関係文の機能を示している。

Ein Liebespaar, Arm in Arm und *lachend*, begegnete ihr (Luise Rinser, Erste Liebe)

それに類似したものとしてあげられるのはやはり Mann の文章である。そこに使われている分詞構文は決して同時性や繼續性を表わして上位の文の動詞の態様を説明するのではなく、主語の状態の説明である。しかもその主語は副文である點が特異であって、實はそれ故にこそさらに関係副文を使う繁を避けるために分詞構文を使っていると解されるものである。

Es war da sodann der Blattschmetterling, dessen Flügel, oben in volltönendem Farbendreiklang *prangend*, auf ihrer Unterseite mit toller Gnaugigkeit einem Blatte gleichen, nicht nur nach Form und Geäder, sondern dazu noch durch minutiöse Wiederbekleiner Unreinigkeiten, nachgeahmter Wassertropfen, warziger Pilzbildungen und dergleichen mehr. (Faust)

(iii) 分詞の好まれるのは簡潔性の文であるが、それは副文の中にさらに副文を使うような場合、後者の代用となり得るのである。これは上の Mann の文章にもうかがわれたが、しかし普通はその分詞構文が場所の移動を表わす動詞を中心としていることが多く、その場合大抵 *als* や *nachdem* などに導びか

れる副文で書き代えられるものが多い。それだから、上位に立つ副文の動作と同時性を表わすのではなく、またその動作の態様を説明するのでもない。むしろ分詞の動作に續いて上位の副文の行動が起きるのであって、英蘭の諸語ではそのような分詞構文は完了形にして表わせるものである。

Am nächsten Tage aber geschah es, dass die dritte Schwadron, von Berlin *zurückkehrend*—im Glauben, es könne ihrem Rittmeister nur ein Unrecht geschehen sein, dem Grafen von Prittwitz, der mit ihrem verläufigen Kommando betraut war, dem Gehorsam verweigerte. (Zuckmayer, id.)—wie er, aben aus dem Bade *kommend* und in eine frische Toga gehüllt, sich anschickte, zu dem tobenden Volk hinaus-zugehen (Le Fort, Pilat)—In diesem Augenblick vernahm ich wohlbekannte helle Klingeln vom Pferdegeschirr meines Vaters, der, aus Dörfern *heimkehrend*, gemächlich in den Marktplatz hereinfuhr (Carossa, eine Kindheit) 次の文は副文の中に入れられたものではないが、主語に直續した分詞構文として上の場合同様の働きを示して居る。

Jost, gegen Abend nach Dienst und Befehlsempfang den gewohnten Weg zu Lillis Haus *eilend*, begegnete kurz von ihrer Tür einem unbekannten, etwas schäbig aussehenden Menschen……(Zuckmayer, id.)

(iv) 目的の名詞・代名詞を説明する „objektiv-predikativ” の用法は古くから存在するものであるが、現代においても多くの場合主語の動詞はやはり知覚動詞が多い。

Wenn sie ihn *schlafend* fand, beugte sie sich über ihn und griff die Fessel ab. (Aichinger: der Gefesselte)—Als ich suchend die nun ganz verdunkelte Gass hinterblickte, bemerkte ich etwas dicht über der Erde sich Bewegendes, *schleichend*, *kriechend*, *furchterregend*, noch eh' ich es genau erkannt hatte. (Ricard Huch id.)—weil sie mich auf dem Bett *liegend* fanden inmitten der grössten Unordnung. (id.)—Als

Lili heimkam, traf ihn am Tisch *stehend*, das Schrauben gross vor sich ausgebreitet, das Wehrgehänge mit Degen und Pistole in der Hand—mit hellem strahlenden Gesicht. (Zuckmayer, id)

次の文も意味の上から言ってこの種の文と考えられるが、語順はやはり微細なニュアンスを表現していると言うべきものであろう。

Nun aber spürte sie *aufsteigend* würgenden Ekel. (Luise Rinser, id.)
すなわち „ムカムカする嘔氣が上ってくるのを“感じたと言うより”こみ上げて息がつまりそうな嘔氣を”感じたとしても譯すべきであろうが、分詞がたて続けに使用されている點で印象的である。

次の *Zweig* の文もやはり知覺動詞に伴う *objektiv-predikativ* の分詞であるが、主語のテンスが過去完了である所と、同種の分詞の重なっている點が特異である。

Nie hatte ich den Himmel gesehen wie in jener Nacht, so strahlend, so stahlblau hart und doch *funkelnd, triefend, rauschend, quellend* von Licht, das vom Mond verhangen niederschwohl und von den Sternen und das irgendwie aus einem geheimnisvollen Innen zu brennen schien. (Amokläufer)

(v) 古くから頻繁に用いられた語法ではなく、また古典語の影響によるものでもなく、むしろ英蘭等に普通の簡潔な分詞構文にヒントを得たと思われるようなスタイルがある。その一つは分詞によって *dass-Satz* を導びき出すものである。英語の *knowing that*, *saying that* やオランダ語の *zeggende, dat* (=sagend, dass), *hopende, dat* (=hoffend, dass), *overwegende, dat* (=erwägend, dass) と言った構文のうち *sagend* を使うことはなく、また *hoffend, erwägend* などは *in der Hoffnung, dass* あるいは *in (der) Erwägung, dass……* という表現にするが、*knowing that* に當る *wissend, dass* は時々作家によって使われる。しかし大ていそれは主文のあとに説明として書加えられた形式をとっている。

Albrecht und Joie aber ritten hinaus; unbeschwert, *wissend* nun, dass sie sich liebten. (Binding: der Opfergang)—

Verstehen Sie, was heisst, Arzt zu sein, alles wissen gegen alle Krankheiten—die Pflicht haben, zu helfen, wie Sie so weise sagen—und doch ohnmächtig bei einer Sterbenden zu sitzen, wissend und doch ohne Macht……nur dies eine, dies Entsetzliche *wissend*, dass man nicht helfen kann, ob man sich auch jede Ader in seinem Körper aufreissen möchte……(Zweig, id.)

やはり英蘭の諸語では時に見られるのに、本来のドイツ語では滅多にないものとしては分詞構文の前に従属接詞が置かれる場合である。

Das Haus, *weil* ein wenig *vorspringend*, lag überhaupt recht eigentlich in der Schusslinie, (Fontane, id.)—Auf dem Schulthron hoch und erhaben, war ich auf dem Boden bloss ein Knirps, den der kleinste Schüler, *obgleich sitzend*, überragt (Carossa, eine Kindheit)

分詞あるいは分詞構文はしばしば従属接續詞を持つ副文で書き換えることができる。その一番多い例は *als*, *da*, *während*, *indem* 等に導びかれる副文である。しかし *Curme* もあげているように場合によつては理由、條件、認容の副文ととれるものがあるが、それは文脈の上から判断されるだけであつて、それだけでは *indem* とか *während* による副文ととれる餘地がある。しかるに上例の *Fontane* や *Carossa* の文では接續詞の使用が一切の疑義を取除いている。もっとも *als ob* に導びかれる副文と等價の分詞は主文の動詞そのものがそのような意味を暗示するのが普通であるから、接續詞を用いる必要がないと言える。

Erklang dann im Morgengrauen Ernas leiser Schritt, so stellte sich Hugo aus einer plötzlichen Scham *schlafend*. (Franz Werfel: Kleine Verhältnisse)—Und als sie sich daraufhin *schlafend* stellte, hörte sie eine andere Stimme sagen (Zuckmayer, id.)

(vi) 以上扱った語法からも察せられる所は、分詞(構文)の使用の目的が表現を簡潔にすることにある点である。(iii)は副文の中にさらに副文が入って来る場合これに代る表現としての分詞構文を扱ったのだが、そこに見られた時間の繼續性も存在せず、全く複雑な構文の中で、これを用いることがもっぱらスタイルの上で好ましいために幾つか重ねて用いられることがある。それは息の長い文を生硬ならしめず、変化を與えている點で素人の容易に模倣できないスタイルであろう。

Und genau wie das Rad in allen seinen technisch gesteigerten Formen—unter der Lokomotive *rollend*, das Automobil *vorwärtsschnellend*, im Propeller *umschwingend*—die Schwerkraft des Raumes, so überwindet die Schrift, gleichfalls längst fortgeschritten von der beschriebenen Rolle, vom Einblatt zum Buch, die tragische Erlebnis- und Erfahrungsbegrenztheit der irdischen Einzelseele: durch das Buch(Zweig: Essays)—in denen sich die Menschen zusammendrängten, nach den Gewohnheiten der Jahrhunderte *lebend, sündigend* und endlich *sterbend*, um anderen Platz zu machen, die wieder nach denselben dumpfen eintönigen Gewohnheiten lebten, sündigten und starben. (Le Fort, id.)

(vii) 文法上の制限を脱した用法。

作家は自己の考えた適當に傳達しようと努め、時々規範文法から見て逸脱したと思われる文を書くことがある。しかしその場合心理的な説明は加えられるのが普通である。さもなければ第一理解されないであろうから。

たとえば Hugo *zitternd*, das Haus würde erwachen, floh ins Bett. (Werfel, id.) という文章は文法的には Hugo の位置は *floh* の後でなくてはならないが, *zitternd* に原因=内容を表わす副文がかかっているため、文頭におくことによって注意をうながしているのである。一方 *zitternd* に内容の副文がかかることも普通ではないが, *fürchtend* とか心の内容を示す動詞を使う

よりは直接讀者の心に迫るものがある。また Le Fort は Sie sollen sehr standhaft gestorben sein, bis zuletzt ihren Glauben *bekennend* und sogar ihren Henkern *verzeihend*. (id.) と書いている。これも規範文法の上からは餘りお目にかかるものではないが man sagt, „sie starben……”の意味であることが明白だから、完了不定詞につづく分詞構文も大しておかしく感ぜられないのである。

× × . × ×

6. この他にも分詞の特殊な使い方はまだまだ色々集められるだろうから、上にあげた例は一断面にしか當らぬかも知れない。たゞそこで展開した例を以ても如何に作家が好んでこれを使うかということが察せられたであろう。特に Thomas Mann, Carossa, Zweig といった Kunststil の大家や Huch, Le Fort のような圓熟した女流作家は多彩な使用を示している。しかして口語と文語の差は二格や接續法の用法や語順において大きく現れるのみならず、その點については現在分詞 ほどはつきりしたものはないとさえ言い得ることが明かにされたであろう。

(註)

- (1) ドイツ文學 (Nr. 14, 1955): Zur Syntax des Partizipium Präsens in der Lutherbibel
- (2) 私の知る限り、この問題をもっともしっかり追求した研究は英人 James Clark の „Beiträge zur Geschichte der periphrastischen Konjugation im Hochdeutschen (Inaugural Dissertation, 1914)” である。
- (3) „火事だ” という意味の „Feuer!,” 氣をつけよ” という意味の „Achtung!” は一つの文であると言える。